



Newsletter

vol. 3

シェルター「丘のいえ」開所式●

子どもセンター「パオ」1周年記念イベント告知●

イエローレシートキャンペーンに初参加●



リレーエッセイ 私が出会った子どもたち① 「どんどん広がれ、子ども支援の輪！」

理事長 多田元

ある日、少年鑑別所で17歳の女子少年と面接していたときの事です。

彼女を取り調べた刑事が彼女の話に耳をかさず、大声で問い詰める姿が父と二重映しになってイヤだった、と話したとき、涙がちょっとこぼれて「これまで人前で涙なんか出さなかったのに」とこらえています。私はとっさに「弁護士は人じゃない。お地蔵さんだと思って、泣いていいよ」と言うと、一瞬笑った彼女の目からとめどなく涙が流れました。

幼い頃の父の暴力、父母の葛藤と離婚、小学校時代にいじめられ、高校では彼女の人格を無視した教師に反抗して殴られた体験、不登校、母の期待に背いて中退、「そういう自分が好きでない」と語る彼女のこれまでの寂しさ、情けなさ、憤り、不安、さまざまな感情があふれてきているようで、黙ってきれいな涙を見ているだけの面接になりました。それはとても大切な時間だったように思います。

「自分を好きでない」から、「自分は自分でいい」に変わっていく出発点になればと願いながら。

子どもセンター「パオ」のシェルターもこんな子どもたちとのすてきな出会いの場、傷ついた子どもが回復し、自立へ向かう大切な時間を過ごす居場所にしたいと思います。仲間たちの大活躍でシェルターの準備は着々と進められるとともに、支援の輪も広がっています。この輪のなかには自分自身が豊かに成長できることが実感されます。

いま、赤ちゃんポストが話題です。親の無責任な育児放棄を助長すると顔をしかめる人も多いようです。「赤ちゃんポスト」の名の由来は知りませんが、マスコミが流行させるこのネーミングには疑問を感じます。設置した熊本県の慈恵病院では

「こうのとりのゆりかご」と名づけています。「赤ちゃんポスト」という名前には、子どもを物扱いし、そうする親への世間の非難の視線を感じてしまうのです。その背景には、子育ては親の「個人責任」や「わが子主義」の意識がないでしょうか。何より子ども自身が将来どんな風に感じるのか。子ども自身が人の温かさを感じとることができるイメージにできないものか。「赤ちゃんポスト」の名が含む無機質な響きは子どもの人格を傷つける「いじめ」の道具にも使われるのではないかとさえ予感します。

子育ては、周りの温かい支援もないまま、親だけが肩身狭く孤独になってするものではないはずです。子育ては社会で、みんなで助け合っているもの、と視野をもっと広く、温かいまなざしに満ちたものにしたいものです。

子どもセンター「パオ」の活動は、子どもたちと共に歩みながら「共に生き、共に育つ」社会の潮流に乗ることを願っています。

どんどん広がれ、子ども支援の輪！

